2005年度 芝浦工業大学 建築工学科
卒業研究梗概

流出

K02086 松井 勝仁

総人口比1.3%

これは、日本の総人口における外国人登録者数の比率(2000年末)である。日本国民の人口減少が始まったこと、不法在留者を含めると要は日本ではすでに人口100人のうち1～2人は外国人であるということを意味する。外国人登録者数の伸び率はここ数年50%を超える急激なものである。

ヨーロッパ諸国の政策と同様の人口減少を海外からの移民で補うという方法を日本も大きくは違わないかたちで導入すると思われる。これに関しては多くの批判があるが、現実問題として外国人受入の絶対数が増加するのは間違いないであろう。

年間26人 対 10,000人

移民とは別に、難民と呼ばれる人たちがいる。一般に「人種、宗教や政治的意見を理由に、国に帰れば迫害を受けるおそれのある人」と定義される。日本では1982年に関連法案が制定されるも、認定審査基準も不服申し立て方法も存在しないというのが実情で、事実上機能していない。主要諸国が年間10000～20000人を受け入れているのに対して、2001年の実績は26人となっている。このような実態では国内にいる限り難民という存在を実際に目にすることはおろか、意識にも上らないのは当然のことといえる。

日本はUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)に対して世界二位の経済援助をしているが、受入そのものへは消極的な姿勢を示している。こういった現状は国際社会から批判をあびており、外国人受入緩和の対象には通常移民に加えて難民の受入を積極的に含めていくことが必要とされる。

新しい日本国住人

主人公はUNHCRの第三国定住プログラムに基づく受入難民と定義する。第三国定住とは、国内にて直接難民申請を受けて審査するものとは違い、日本政府がUNHCRからの要請を受けてすでに第三国で難民認定された人々を一定枠内で受け入れるというものである。メリットとしては、自国で難民認定を行うものではないので、手続きの簡素化、専門家の養成を待たずに導入できるということ、そして受入人数枠、受入人物を日本政府が決定できるという点にある。自国で難民認定をした場合、国際法にて認定国がその保護責務を負うが、第三国定住プログラムにしたがった場合は数的、質的コントロールが可能ということである。

これは難民の選別ともいえる行為だが、現状「無」に等しい日本社会においての難民問題が段階的に進歩していく第一歩を踏み出した瞬間を時間的設定とする。そしてそれは非常に近い将来におとずれるであろうと予想される。

浅草アイデンティティー

今回の敷地は浅草寺と隅田川に挟まれた土地である。浅草寺には現在の隅田川から引き上げられた観音が祀られている。権力の象徴としてではなく、庶民の寺として、その周辺も庶民の街として栄えてきた。

江戸時代には被差別民が浅草の非人頭のもとに集まり、技術や芸能の発展を遂げ、また、ハンセン病の患者、戦中・戦後は傷痍軍人をその境内に内包してきた。彼らは当時の社会からはその存在を否定された流出者であり、浅草寺はその存在を受け入れてきた。浅草のアイデンティティーには「救い」という一言が挙げられる。そしてそれは浅草の宿命ともいえる。今、視点を遠ざけてもっと広範囲で見てみると難民もまた現代の救われるべき流出者なのではないか。

当の浅草そのものも、技術伝承の後継者不足、他都市との均質化、といったアイデンティティーのいくつかが流出している状況を迎えている。浅草駅は現在東武伊勢崎線の終点ターミナルとして機能するが、東武鉄道がターミナルを敷地のやや北にある北千住にシフトしつつあることにより都心へのアクセス点としての意味を喪失し、また長距離列車も順次始発駅を新宿へと移す計画が決定。その存在意義が流出してしまった。このまま駅の東を流れる隅田川同様、過去のインフラになる日は近い。

写真：敷地上空

学ぶべきもの

日本へとやってきた「彼ら」は日本社会の中で生活を開始するわけだが、言語や文化といった社会背景が全く異なる土地へ溶け込むのは容易ではない。社会順応への研修プログラムが必須となるのは明白なことだ。

しかし、教育が必要なのは日本に来た彼らだけではない。「受け入れる側」にこそ学ばなければならないことがある。国際都市というのは、ただ単に外国人観光客やビジネスマンを迎え入れるだけではない。難民というものが実際に存在する。この当たり前のことをどれだけの人が認識しているのか。また国際社会と向き合うとはどういうことなのか等々、我々にはまだ知らぬことが多すぎる、ということへの気づきが最も重要といえよう。

必要とされるのは、相互教育の場である。郷に入れば郷に従えという言葉もあるが、今はあえてその言葉を否定する。他を理解することを放棄してしまえば進化はないものと信じたい。ハイカラな街という名声を得た浅草は先進的な何かを求めていたはずだが、今やかつての最先端を「レトロ」という言葉に置き換えて進化を止めてしまった。そこに元々いた人も、そこに目的をもって来た人も、たまたま通りかかっただけの人も、それぞれに学びあうことはあるはずである。そこで不特定多数の人間が交差する場所として最たるものである駅(浅草駅)をその中心拠点として設定する。

時代を反映する都市

浅草寺は救いという宿命を負った。そしてそれは浅草寺を信仰する人々、そしてその場を訪れる人もまた負わなければならない。庶民や社会的弱者から発生した文化を発展させてきたこの街は、新たな時代を迎えている。しかし進化は必ずしも巨大な金や企業によって行われるものではない。かつてと同じく、小規模かつ多様なものの集合体が社会を形成していくことを可能にしたい。

言語教育と平行して、地元商店、企業はインターンシップとして彼らを受け入れる必要がある。地域全体を教育施設としてそこで商業ノウハウの習得といった就労支援を行う。同時に、双方が望めばそこでの就労を続けることのできるような場とすることができる。それは後継者不足を補うという移民政策の趣旨にも沿うものともなる。また、言語教育も日本語や英語を習得することにより、今度は同じ場で母語の語学教師となることも可能である。

難民は一回受け入れて終わるものではない。次々と新たな人間たちがこの土地に救いを求め、また出て行くであろう。常に新陳代謝を繰り返し、時代を反映する鏡となることを目指す。

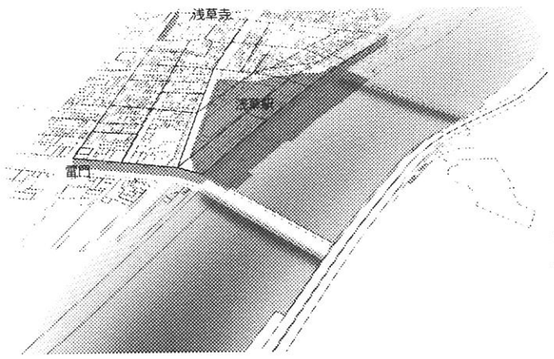
以上は一例であるが、この計画が、現代社会の「流出物」と「流出元」を融合させ、建築単体ではなく、周囲の環境と機能を共有することにより成り立つものとなることを期待する。

日本国憲法にはこう記される。「すべての国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により差別されない」と。国民とは、国籍の問題ではない。その国に暮らす人全てにあてはまらなければいけない。

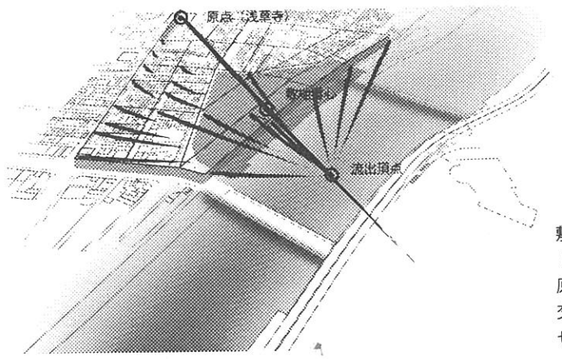
『参考文献』

陣内秀信 編『水の東京』 岩波書店 1993年
奥井智之『アジールとしての東京 日常の中の聖域』 弘文堂 1996年
スチュアートヘンリ『民族幻想論』 解放出版社 2002年
一橋大学 佐藤哲夫研究会『日本の難民受入政策』 ISFJ2005政策フォーラム発表論文 2005年

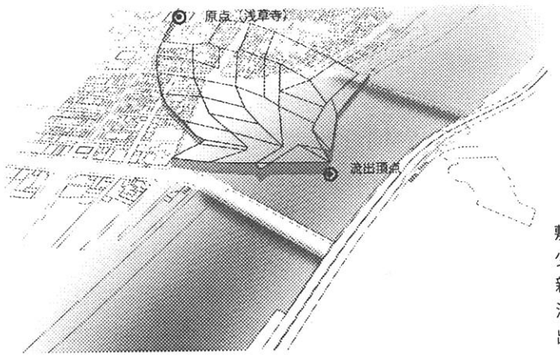
指導教員 伊藤 洋子 教授



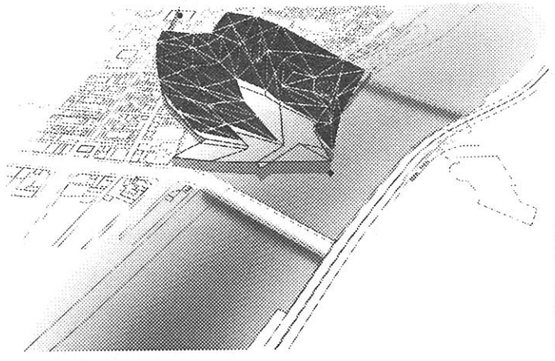
浅草寺から東と南に伸びる線がそれぞれかつてのインフラである隅田川と広小路にぶつかった地点までを敷地として、その中の街区割をピックアップする。



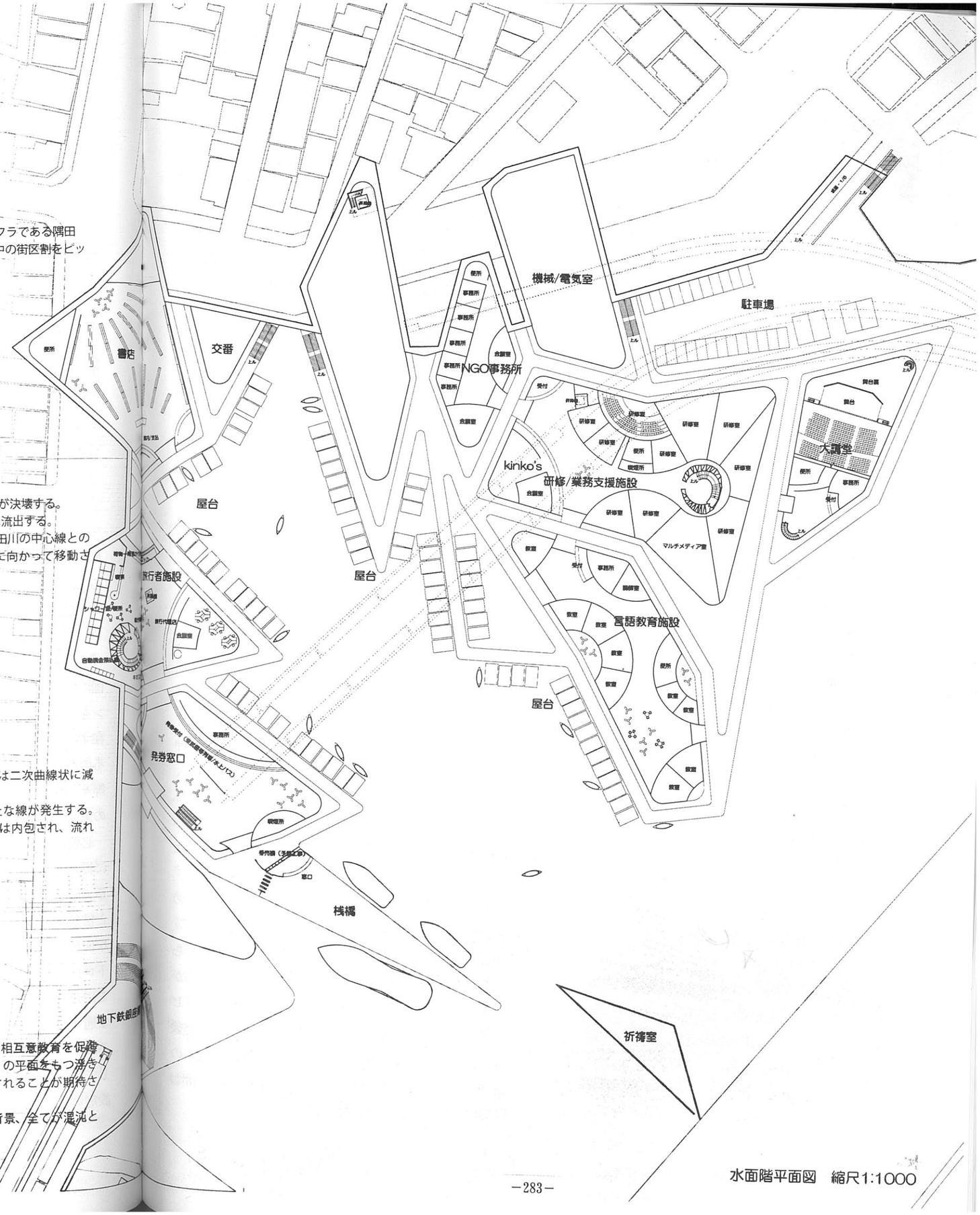
敷地を一旦リセットすることにより、その部分の堤防が決壊する。
これまで堤防によりせき止められていた街は隅田川へ流出する。
原点を「浅草寺」、流出頂点を「原点→敷地重心→隅田川の中心線との交点」と設定し、街区割による全ての点を流出頂点に向かって移動させる。



敷地重心が最大移動距離をとり、そこから移動距離は二次曲線状に減少し、原点、流出頂点でそれぞれゼロとなる。
新しく設定された移動後の点を結ぶことにより新たな線が発生する。
浅草寺と隅田川を結ぶこのシェルターにプログラムは内包され、流れ出た街が流れ出た人々を受け入れる。



「街」そのものを敷地として、「彼ら」と「僕ら」の相互意教育を促進させる。また経済活動も行われるよう 3000×5000 の平面をもつ浮き屋台が提供され、各々の個性による小空間が展開されることが期待される。
同時に水上バス、鉄道のターミナルとして国籍、背景、全てが混沌とした「不特定多数」の集合体となる。



水面階平面図　縮尺1:1000